

1. 中島町と鉈打地区の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4930

1. 中島町と鉈打地区の概要

鹿野勝彦

- I. はじめに
- II. 中島町
- III. 鉈打地区
- IV. おわりに

I. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、1999年度の調査実習を、石川県鹿島郡中島町の鉈打地区において実施した。本報告書はこの調査実習への参加者が分担執筆した報告によって構成されており、当研究室の調査実習報告書としては15冊目のものとなる。¹⁾

ここで調査対象地区決定までの経緯について、若干ふれておく。当研究室の調査実習は、1997年度までは、基本的には世帯数100前後の規模をもつ集落を調査の対象とし、参加学生の数が多い（10名を超える）場合には2班編成として、同一行政単位内にありながら相互に性格の異なる集落を比較するという方針でのぞんできた（例えば1990年度、1993～1997年度）。ただ1998年度は、スタッフ側の事情で、参加学生が18名を数えたにもかかわらず、対象をかなり規模の大きい（世帯数300弱）1集落にしぼった。これに対して1999年度は、10の集落を含む1つの地区（総世帯数350強）全体を対象とすることとなった。このような対象設定は、当研究室の調査実習としては初めての試みであるが、これは必ずしも当初からの方針であったわけではない。

中島町については、1997、1998年度に富来町内で調査実習を行っていた当時から関心を持ち、若干は資料も収集していたが、1999年度の初めにスタッフが予備調査を開始した時点では、なお特定の集落を対象をしぼるつもりであった。しかし予備調査を進めるにつれ、特に候補地としてまず名前の上った鉈打地区内では、個々の集落は最大でも70世帯余りと比較的小規模であり、かつ全体でも350世帯強で一応調査が可能な範囲内であること、地区を単位とした活動が活発で、それらの中にはかなり特色のあるユニークな性格のものも多く、まとまりも強いように見受けられたこと、そしてなによりも地区としての積極的な協力が得られそうな感触を得たことなどから、地区全体を調査対象とすることに踏みきったのである。5月末には地区内の大部分の集落の代表者の方々にお集りを頂き、調査の趣旨、方法などを説明して、実施についての基本的な了承を得た。以後のプロセスについては、ほぼ例年通りの経過をたどったので、ここには詳述しない。²⁾

報告書作成の方針も、基本的には従来のそれを踏襲し、参加者が調査を通じて特に関心をもったテーマに関して記述、分析することを優先しているため、全体としては必ずしも網羅的、体系的な構成をなしていない。そこで本章ではこのことを前提として、鉦打地区と、地区がその一部である中島町について、最少限の一般的記述を行った。また2章では鉦打地区と、これを構成する各集落(区)の組織についてまとめた。この2章は、3章以下の各論への導入を行うことを目的としている。本章では資料としては、直接の聞き取りによるもののほかは、主に、2回刊行されている『中島町史』(1966年と1996年)、1954年創刊の中島町の広報誌『広報なかじま』(当初は公民館報)の他、鉦打地区の公民館報や国勢調査、農業センサス、調査時点での町役場の統計資料等によっているが、それらは巻末の「参考文献・参考資料」の項に記してある。

II. 中 島 町

中島町は能登半島東岸(いわゆる内浦)中部に位置する。東は七尾湾をはさんで能登島に相對し、南は田鶴浜町、西は志賀町、富来町、北は穴水町と接している。町域はおよそ99km²で、町の中央部で七尾湾に注ぐ熊木川、日用川などの下流部には低平な沖積地が形成されているが、その大部分は標高100~350m前後の森林におおわれた丘陵地である。

町の東部、七尾湾沿いにはのと鉄道(かつてのJR七尾線)と国道249号線がほぼ平行しており、町内には南より笠師保、能登中島、西岸の3つの鉄道駅がある。またその西の町域のほぼ中央部を南北に、といってもかなり蛇行しながら、能越自動車道(能登有料道路)が縦貫しており、その中ほどの地点に横田インターチェンジが設置されている。一方町域内での東西方向の道路としては、主要地方道富来・中島線、福浦港中島線、県道豊田・笠師保線、土川・浜田線、長浦・中島線、長浦・小牧線などがあって、各地区間及び町域と周辺市町間を結んでいる。特に能登島とは、最近になって直接、橋で結ばれ、容易に往来できるようになった。かつてに比べれば道路網の整備はたしかに進んでおり、これによって七尾・羽咋などは通勤、通学圏に、また金沢へのアクセスも著しく容易になったといえる。ただ公共交通機関は、鉄道の他、若干のバスの便もあるが、近年は便数がむしろ減少する傾向にあり、決して便利であるとはいえない。

行政的には現在の町域は1954年に鹿島郡の豊川、熊木、笠師保、西岸、中島、鉦打の6カ村が合併して形成されたが、このうち鉦打村はもともとは羽咋郡に属しており、さまざまの経緯から1948年に鹿島郡に編入されたものである。これらの旧村は現在でも町内の地区として一定のまとまりと機能を有しているが、各地区はさらに6~10の区から構成されていて、町全体では44の区があることになる。区の多くは元来いわゆる自然村的な性格を持っていた集落である

が、そのなかでもその後著しく戸数が増えた場合には分割された場合もあり、また近年になって形成された「団地」や老人ホームなどを包含する場合もある。現状ではその規模は5～120世帯とかなりの幅があり、性格も多様である。ただいずれにせよ、これらの区には各々に区長がおり、そのほとんどでは2から14の班があって、一定の自治機能と、行政の末端単位としての役割とを合わせもっている。もっともこういった地区や区の組織や機能のありかたは、いうまでもなく、中島町に独特というわけではなく、むしろこの地域一帯で普遍的であるといつてよい。

中島町と6地区の世帯数、人口の動態（合併以前については、現在の町域の合計）の概略を得られる資料からまとめると、表-1のようになる。

表-1 中島町と各地区の世帯数、人口の動態

年 度	中島町		西 岸		鉦 打		熊 木		中 島		豊 川		笠師保	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1889(明22)			354	2,048	405	2,294	296	1,560	244	1,185	427	2,402	290	1,555
1919(大 8)	2,065	10,851	341	1,714	389	2,153	342	1,814	260	1,473	416	2,027	317	1,670
1940(昭15)	2,022	9,859	351	1,829	372	1,788	344	1,586	256	1,241	402	2,025	297	1,390
1954(29)	2,325	12,002	375	1,925	468	2,390	404	2,044	313	1,525	446	2,328	351	1,790
1965(40)	2,291	10,554	384	1,860	398	1,845	437	1,954	311	1,360	429	2,032	332	1,503
1970(45)	2,238	9,642	374	1,608	379	1,688	423	1,836	316	1,281	421	1,822	325	1,407
1975(50)	2,247	9,357	373	1,583	362	1,575	432	1,797	336	1,332	419	1,716	325	1,354
1980(55)	2,248	9,086	358	1,490	383	1,558	420	1,723	341	1,326	416	1,657	330	1,332
1985(60)	2,243	8,854	364	1,436	372	1,462	426	1,676	347	1,345	414	1,623	320	1,312
1990(平 2)	2,211	8,357	356	1,381	362	1,356	419	1,563	351	1,290	409	1,554	314	1,213
1995(7)	2,233	7,923	359	1,363	357	1,250	470	1,611	346	1,164	399	1,422	302	1,110
1999(11)	2,336	8,170	436	1,354	357	1,287	461	1,645	355	1,264	412	1,474	315	1,146

1889-1975 『中島町史・資料編』下巻 p.730、731、732、734

1980-1995 国勢調査『市町村地区別人口および世帯概数』各年

1999 町役場資料

地区によって差はあるが、全体としては、世帯数の変動はさほどないものの、かつては12,000人を越えていた人口が、現在では8,000人をやや越える程度にまで減少しており、同時に高齢化もかなり進行している（表-2参照）、これにともなうさまざまな問題の存在を予測させる。ただこの点についても、地区により、また集落によって状況も、また問題のありかたやこれに対する対応も一様ではない。それらの一部については、次節および2章以下の各論でも、具体的に検討することになる。

町の中心部は町域の中央部東よりの熊木川下流部左岸に位置する中島地区で、ここには町役

場をはじめ町立中島中学校、郵便局、警察の駐在所、消防署、さらには近年の町の活性化を目指す活動の中心的な施設である文化センター（能登演劇堂）といった施設が集中しており、商店街も形成されている。また熊木川、日用川の中、下流域には水田が広がっており、熊木、中島、豊川各地区のこの範囲の集落は、もともと農村的な性格を強く持っていた。一方、海岸沿いの西岸、笠師保地区は、平地が狭隘なためもあって漁業、特にカキ養殖などを主とする沿岸漁業に依存する半農半漁村的集落が多く、また海岸沿いの立地を生かして観光業に従事する人も少くなかった。これに対して熊木川、日用川の上流部とその支流域に位置する集落は、町域の大部分を占める丘陵の山林での林業に生活のかなりの部分を依存する、山村的な性格が強かった。このように中島町域においては、必ずしも広大とはいえないにもかかわらず、経済的には地区により、集落によって、著しく多様性に富んでいたのである。ただ近年では一般に第1次産業が低迷し、また他方で道路網が整備されたこともあって、住民の多くは町域を越えて通勤、通学し、また買物や娯楽の場も町外に求める傾向が強くなっている。

表-2 中島町、人口の年齢別構成の動態

年 度	0～14歳		15～64歳		65歳以上		合 計
	人 口	比率(%)	人 口	比率(%)	人 口	比率(%)	人 口
1960(昭35)	4,136	36.6	6,295	55.7	872	7.7	11,303
1965(40)	3,285	31.1	6,365	60.3	903	8.6	10,553
1970(45)	2,536	26.3	6,088	63.1	1,021	10.6	9,645
1975(50)	2,184	23.3	6,059	64.7	1,115	11.9	9,358
1980(55)	1,924	21.2	5,816	64.0	1,346	14.8	9,086
1985(60)	1,788	20.2	5,565	62.9	1,501	17.0	8,854

『中島町史・資料編』下巻 p. 735～736

こういった状況のなかで、中島町は一方では伝統的な文化遺産を積極的に活用し、他方では新しい文化活動の場を創造することで、町外とのつながりを強化し、町の活性化をはかる積極的な試みを展開しようとしている。具体的には、その前者の例が、熊木地区のみならず町内の多くの集落の総社としての性格を持つ久麻加夫都阿良加志比古神社（熊甲神社）での、国指定の重要無形民俗文化財である杵旗神事をはじめとする祭礼行事の観光資源化であり、後者の例が、能登演劇堂での、劇団無名塾等と連累しての、さまざまな演劇活動の展開であろう。

だが、本調査の直接の対象は中島町全体ではなく、その一部を構成する鉾打地区である。以下では鉾打地区にしばって、その概要をやや具体的に記述してゆくこととする。

Ⅲ. 鉈 打 地 区

鉈打地区は中島町の北西部に位置し、熊木川中、上流とその支流である河内川、西谷内川、鳥越川、免田川などの谷筋に立地する、別所、河内、大平、古江、鳥越、西谷内、藤瀬、町屋、上島、北免田の10集落（区）から構成されている。ただしこのうち別所は、かつては西岸地区に属していたが、1962年以降、道路事情の変化等にもとない、鉈打地区に編入された。また河内川最上流部には呉竹集落があったが、1970年代後半に廃村となっている。

地区の中南部にあたる熊木川中流域では、谷の兩岸の平地も広く、北免田、藤瀬、上島、町屋、鳥越などの諸集落は、前面には水田を、背後には丘陵地を背負う形で立地していて、開けた農村的景観を見せている。中島地区から熊木川に沿って北へ延びる主要地方道富来・中島線は、藤瀬から古江、西谷内地内に入るあたりで西へ折れるが、この道路沿いには地区の総社ともいうべき藤津比古神社（厳密には別所を除く鉈打の全集落の他、富来町稗造地区東部の9集落の総社でもある）、地区の公民館（鉈打高齢者センター）、町立鉈打小学校、保育園、郵便局、駐在所、診療所などの公共施設や、商店などが集中していて、バスも通じており、いわば地区の中心部をなしている。またこの付近では、1940年代には一時亜炭の採掘が行われ、活況を呈したこともあるというが、現在では当時の状況を想像することは困難である。

これに対して地区の周辺部にあたる熊木川上流部とその支流域では谷も狭まり、水田を造成できる土地もきわめて限られている。そこに位置する別所、河内、大平などの各集落や、西谷内、古江などの北部は、狭隘な谷沿いの山村的な景観をなしているといつてよい。

こういった立地の差に着目して、以下では地区の集落を農村的集落、山村集落と仮に区分するが、一部集落はその双方の性格をあわせもっていることになる。こういった集落の性格は、その生業のありかたにも、またここ数十年の世帯数、人口の動態にも、一定の影響を及ぼしてきた。

表-3は、鉈打地区各集落の農業、林業のありかたの一端を示すいくつかの指標の、1960年-1995年の変遷を、国勢調査と農業センサスの数値を使ってまとめたものである。いうまでもなく、各集落を構成する世帯の間にも、その生業や土地所有の規模などにはかなりの差があり、この点を無視して表の数値を安易に解釈することは避けなければならないが、それでも表-3と聞きとりの結果をあわせると、この地区の農業、林業の近年の変化に関して、おおむね以下のようなことが言えそうである。

まずこの地区では全体として、1960年代後半あたりまでは集落を構成する世帯のほとんどが農家であり、専業農家こそ少いものの、その大部分が1種兼業農家であった。この中で河内には2種兼業農家の比率が高いのが目につくが、これは林家として、林業収入が農業収入を上まわる世帯が多かったことを示している。集落ごとの林家の山林所有面積は、耕地（特に水田）

に比べても変動が激しいが、それでも山村の集落における平均所有面積が、農村的集落のそれに比べて一般にはるかに大きいことは、あきらかである。そして林業経営においては一般に、自家消費用の飯米の確保が一定の意味を持つ農業に比べても、より現金収入に重点がおかれ、かつ外部の業者等との接触の機会もひんばんであったことを、忘れてはならない。実際、地区のなかでも山村の集落には、農村的集落に比べ、より豊かなイエが多かったという人も少ない。

地区全体としては、1970年前後を境として、農家の2種兼業化が急速に進んでゆくが、これは全国的な動向と一致している。地区内では山村的な集落において、この変化がやや遅れて生じているのは、この時期の農家の2種兼業化は、主としてその構成員の通勤賃金労働者化によるものであること、それは主要な通勤先となる都市部と農山村集落を結ぶ道路網の整備と自家用乗用車の普及とを前提としていること、と関係しているのだろう。道路網の整備は、この地区でも山村の集落で多少とも遅れたからである。1970年代後半に至って山村の集落においてもそれが一応完了し、一方では薪炭の需要の減少や外材輸入の増加、国産材の価格低下にともない林業が不振に陥ったことによって、それらの集落でも通勤賃労働収入を主たる収入とする農家の2種兼業化はおおむね完了し、その意味では生業面からの農村的集落と山村の集落の差は、表面的にはほぼ解消した。

しかしこの地区においては、1970年前後を境として、集落規模は山村の集落であきらかに縮小してゆくのに対し、農村的集落では現在までほぼ維持されていることは、あきらかである。

また1970年代後半以降、水田の減反政策が強力に進められてきたことは周知のとおりだが、地区内で水田面積の減少の度合いも、山村の集落と農村的集落では、あきらかに異なっている。表には水田の転作にともなう畑作については示していないが、カボチャをはじめとする畑作や農産物加工などで意欲的に稲作以外の農業に取り組んできたのも、主として農村的な集落の一部の農家群であったといえてよい。これらの点からは、農村的集落と山村の集落の立地の差は、今日も一定の意味を持ち続けているといえよう。

なお全体としては、集落の世帯数減少にもかかわらず、農家率、林家率も低下する傾向が見られる反面、一部の集落では近年になって専業農家の増加が見られるが、これは一般には、農業に専念する世帯が増えたというより、以下に見るような高齢化にともない、従来の2種兼業農家において、通勤労働者であったその構成員が退職し、賃金収入が無くなったために、結果として専業農家化したにすぎないケースが大部分を占めていると理解せざるをえない。ただ、こういった農家を含め、農業は地区の高齢者にとって、単なる収入源としての意味ばかりでなく、いわゆる「生きがい」を付与する活動となっていることも、見落してはなるまい。各論でふれられているように、地区内の施設や行事での農産物の販売や、地区から都市へ転出した子供などへ米を含む農産物を送ることなどは、その具体的な形である。

表-3 鉈打地区各集落の農・林業指数

集落名	年度	世帯数 (A)	農家数 (B)	農家率 (B/A) %	専兼業農家数			水田面積 a	農家1戸 当平均	林家数 (C)	林家率 (C/A) %	山林面積 ha	林家1戸 当平均
					専	1兼	2兼						
別所	1960	33	33	100	0	26	7	2,338	70.8	32	97.0	171	5.3
	1970	28	28	100	0	10	18	2,140	76.4	27	96.4	473	17.5
	1980	24	24	100	1	1	22	1,893	78.9	23	95.8	438	19.0
	1995	20	21	105	3	7	11	1,566	74.6	20	100	379	19.0
河内	1960	85	85	100	1	46	38	5,549	65.3	82	96.5	579	7.1
	1970	88	80	90.9	2	22	56	4,920	61.5	76	86.4	816	10.7
	1980	75	61	81.3	3	7	51	3,514	57.6	57	76.0	650	11.4
	1995	61	46	75.4	3	3	40	2,539	55.2	43	70.5	281	6.5
大平	1960	10	9	90.0	0	7	2	712	79.1	8	80.0	99	12.4
	1970	5	5	100	0	4	1	510	102.0	3	60.0	56	18.7
	1980	5	5	100	0	1	4	310	62.0	4	80.0	69	17.3
	1995	5	5	100	0	0	5	359	71.8	4	80.0	35	8.8
古江	1960	23	20	87.0	0	13	7	1,391	69.6	17	73.9	85	5.0
	1970	21	16	76.1	0	6	10	1,290	80.6	11	52.4	93	8.5
	1980	20	16	80.0	2	1	13	1,119	69.9	14	70.0	127	9.1
	1995	20	14	70.0	0	2	12	1,031	73.6	13	65.0	125	9.6
鳥越	1960	35	34	97.1	1	27	6	2,072	60.9	31	88.6	182	5.9
	1970	35	30	85.7	1	8	21	2,020	67.3	28	80.0	210	7.5
	1980	35	28	80.0	1	2	25	1,973	70.5	28	80.0	152	5.4
	1995	31	23	74.1	0	1	22	1,812	78.8	19	61.3	65	3.4
西谷内	1960	85	74	87.1	14	53	7	4,406	59.5	58	68.2	215	3.7
	1970	77	71	92.2	1	20	50	4,770	67.2	58	75.3	304	5.2
	1980	74	65	87.8	2	13	50	4,746	73.0	58	78.4	281	4.8
	1995	72	58	80.5	6	7	45	4,503	77.6	50	69.4	274	5.5
藤瀬	1960	63	59	93.7	0	51	8	3,504	59.4	57	90.5	114	2.0
	1970	68	54	79.4	2	10	42	3,640	67.4	49	72.1	203	4.1
	1980	66	50	75.7	2	3	45	3,585	71.7	45	68.2	180	4.0
	1995	62	44	70.9	4	1	39	2,647	60.2	39	62.9	71	1.8
町屋	1960	22	22	100	4	14	4	1,373	62.4	19	86.4	68	3.6
	1970	20	20	100	0	1	19	1,430	71.5	18	90.0	100	5.6
	1980	21	19	90.4	0	1	18	1,388	73.0	16	76.2	100	6.3
	1995	22	20	90.9	3	1	16	1,371	68.6	18	81.8	46	2.6
上畠	1960	31	28	90.3	4	22	2	1,751	62.5	26	83.9	100	3.8
	1970	28	26	92.8	3	8	15	1,730	66.5	23	82.1	137	6.0
	1980	26	24	92.3	1	3	20	1,524	63.5	20	76.9	65	3.3
	1995	27	22	81.4	0	3	19	1,607	73.0	16	59.3	52	3.3
北免田	1960	39	38	97.4	9	22	7	2,703	71.1	33	84.6	44	1.3
	1970	37	36	97.2	1	9	26	2,690	74.7	34	91.9	147	4.3
	1980	37	35	94.5	0	0	35	2,246	64.2	28	75.7	128	4.6
	1995	37	34	91.8	4	2	28	2,071	60.9	32	86.5	56	1.8

世帯数 1960は農業センサス、1970-1995は国勢調査
 その他は農業センサス

地区内の農村的集落と山村集落の性格の差は、その世帯、人口構成にも明確な差となつてあらわれている。

表-4 鉦打地区と各集落の世帯数と人口の動態

年度	鉦打地区		別所		河内		大平		古江		鳥越		西谷内		藤瀬		町屋		上畠		北免田	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1965	429	2,012	31	167	90	436	7	33	21	106	38	159	85	372	69	304	20	105	28	128	40	202
1970	407	1,802	28	114	88	381	5	27	21	89	35	166	77	346	68	287	20	101	28	116	37	175
1975	386	1,682	24	107	79	320	5	21	21	84	35	174	75	328	66	283	20	91	26	111	35	163
1980	383	1,558	24	93	75	292	5	18	20	84	35	155	74	297	66	274	21	83	26	111	37	151
1985	372	1,462	24	86	69	249	5	22	20	81	33	139	73	271	65	253	21	80	26	128	36	153
1990	362	1,356	22	83	64	222	5	19	20	87	33	117	71	253	63	229	21	85	27	125	36	136
1995	357	1,250	20	73	61	198	5	16	20	76	31	112	72	226	62	223	22	85	27	114	37	127

国勢調査

表-5 鉦打地区と各集落の世帯・人口の残存率(1965年を100として1995年の残存%)

残存率(%)	鉦打地区		別所		河内		大平		古江		鳥越		西谷内		藤瀬		町屋		上畠		北免田	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
83.2	62.1	64.5	43.7	67.8	45.4	71.4	48.5	95.2	71.7	81.6	70.4	84.7	60.8	89.9	73.4	110	81.0	96.4	89.1	92.5	62.9	

国勢調査結果による

表-6 鉦打地区と各集落の子供と高齢者の比率(1999年)

	鉦打地区	別所	河内	大平	古江	鳥越	西谷内	藤瀬	町屋	上畠	北免田
人口	1,291	73	198	16	82	111	245	235	87	111	133
子供	人数	158	5	23	2	13	9	28	27	15	14
	比率(%)	12.2	6.8	11.6	12.5	15.9	8.1	11.4	11.5	17.2	10.8
高齢者	人数	382	30	55	4	20	30	83	67	26	39
	比率(%)	29.6	41.1	27.8	25.0	24.3	27.0	33.9	28.5	29.9	29.3

町役場資料による(子供は15歳未満、高齢者は65歳以上)

表-4は地区と各集落の世帯数と人口の1965年から1995年の変化を、国勢調査に基づいてまとめたもの、また表-5はこの数値をもとに、その30年間に世帯数、人口がどれだけ減少したか(表のうえでは、どれだけ残っているか)を示したものである。ここからもあきらかなように、地区全体を平均すれば世帯数は20%近く、人口は40%近く減少しているが、集落としてとりわけその減少の度合いが著しいのは、やはり別所、河内、大平といった山村集落の強い集落である。表-6は調査時点での各集落人口の年齢別構成を、特に子供(15歳未満)と高齢者

(65歳以上)の比率に注目して示しているが、ここからも山村集落において住民の高齢化がより顕著であるという傾向がうかがわれる。また表-7は各集落の世帯のうち、単身および夫婦のみで構成される世帯(そのほとんどが比較的高齢者よりなる)が占める比率を示している。これらを全体としてみると、山村集落では農村的集落と比べて、単に世帯数や人口の減少のみでなく、いわゆる過疎化、すなわち世帯数、人口の減少の結果として生じる生活条件の悪化、より具体的には高齢化や世帯の小規模化(両者は同時進行的である)のために、自立して生活することの困難や将来に対する不安を抱える世帯が増加するという過程が、より進行しているように推測される。

表-7 鉦打地区と各集落における単身世帯と夫婦世帯の比率(1999年)

	鉦打地区	別所	河内	大平	古江	鳥越	西谷内	藤瀬	町屋	上島	北免田	
世帯数	359	20	60	5	18	32	72	62	24	27	39	
単身世帯	数	45	2	12	1	0	4	8	8	2	3	5
	比率(%)	12.5	10.0	20.0	20.0	0	12.5	11.1	12.9	8.3	11.1	12.8
夫婦世帯	数	66	5	12	1	0	6	19	8	3	3	9
	比率(%)	18.4	25.0	20.0	20.0	0	18.8	26.4	12.9	12.5	11.1	23.1
A+B*	30.9	35.0	40.0	40.0	0	31.2	37.5	25.8	20.8	22.2	35.9	

町役場資料による *(A—単身世帯比率、B—夫婦世帯比率)

このように、各々の集落(区)が対応を迫られている問題は決して一様ではないし、これに対する区のレベルでの対応もさまざまである。この点は各論でも触れるように、区レベルでの組織やその活動などを詳しく見てゆくと、さまざまな点で微妙に異なっており、その差異の背景にある集落の性格、問題の多様性をうかがわせる。だがここではその一方で、個々の集落の範囲を越えた、鉦打地区全体を単位としたまとまりの強さ、活動の活発さにも注目したい。もっとも合併以前の旧行政単位をひきついだ地区を範囲とするさまざまな施設、組織の存在や、それに基づく活動それ自体は、いうまでもなく鉦打地区に、ないしは中島町内の各地区に限ったことではない。ただこういった地区単位の活動は、近年では特に、旧来から行われてきた伝統的な行事(例えば祭礼、伝統芸能など)を維持しようとするか、あるいはいわゆる「町おこし」的発想のもとに行政が主導し、財政的にも補助をすることによって造り出されるものか(場合によっては両者が組み合わせられるか)であり、かつ一般に、地区を対外的にアピールすることを主な狙いとする事例が多いように見受けられる。だが鉦打地区での地区を単位とした活動には、そういった性格をもつ活動(例えば藤津比古神社での祭礼)などの他に、地区住民が自ら楽しむことを主たる目的とし、少なからぬエネルギーと経費をかけて創りあげ、維持してきた活動(例えば「芸能祭」、「茶屋祭り」など)が、いくつも見られるのである。

そしてこういった活動のうちのいくつかは、現在も住民ばかりでなく、地区で生まれ育ち、その後地区外へ転出していった人々とのつながりを保ちながら展開されてきた。もともと能登においては、地区で生まれた者の多くが、ある年齢に達したのちに転出してゆくことは、古くからむしろ当然のことであったし、近年では少子化、高学歴化の進行とともに、地区に残る者が減少し、後継者不在の世帯が増加していることも、すでに述べたように、集落レベルで状況に差があるにせよ、一般的な傾向といてよい。そして特定の地域に一定数の地区出身者が居住している場合には、それらの人々が連絡をとりあい、組織を作ったり、定期的に会合を持ったりすることは、決して珍しくない。また転出した人々が個々にさまざまな形で出身地とつながりを維持し、特に成功をおさめた人が出身地区の施設などへ寄付を行うといったことも、しばしば見うけられる。だが鉦打地区でのように、例えば関東地区に住む地区出身者が同郷組織を形成し、活動しているだけでなく、その組織自体として地区と持続的、定期的に交流を持つという例は、管見の限りだが、石川県内でも他にはあまり見られないように思われる。こういった鉦打地区の特徴とその背景については、部分的にせよ、以下の各論でとりあげることとなる。

IV. お わ り に

本報告書も例年のことながら、はじめて現地調査を経験する学生の実習報告書であり、参加者、指導者の力の限界もあって、鉦打地区や各集落の特徴、問題などに関して、さまざまな興味、関心を抱きながら、実際には多くの点で十分な記述、分析を行えなかった。各位による忌憚のないご批判、ご叱正をお願いするとともに、ご指導、ご協力を頂いた中島町、鉦打地区の皆様には心より御礼申し上げます。

注

- 1) 既刊の報告書は、巻末の「参考文献・参考資料」の項を参照されたい。
- 2) 詳しくは1999年度の報告書 p. 1～2を参照されたい。